

- 1 教職概論は、文字通り教職に関して、その概要を学ぶ分野である。
- 2 それは、学校の教師になる（教職に就く）為に必要な内容（知識）であり、同時に、教職や教育に関わる人（教育委員会、教育関係者、親等）にとっても必要な知識（教養）である。
- 3 教員採用試験の「教職教養」の分野において、「憲法」「教育原理（論）」「教育課程」「教育行政」「教育心理学」等と並んで、この分野からも出題される。
- 4 教職は、私的な塾やお稽古の教師などとは違い、公（国家）が認定した教員資格であり、公〔国家〕の定める法律（憲法、教育基本法、学校教育法、他）に基づいた職務行動が要求される。教職に関連するこれらの法規に関する理解が求められる。
- 5 教員採用試験は、都道府県ごとに行われる。求められる教員像に関しては、国（文部科学省、中教審答申等）が提示するものと、さらにそれを具体化し、地域に実情に合わせた各都道府県の教育委員会の提示するものがある。教員採用試験を受けるものは、文部科学省や各都道府県の教育委員会のHPなどで調べ、理解しておく必要がある（東京都教育委員会のように冊子を発行しているところもある一配布済み）
- 6 教員の児童・生徒に対する指導には、大きく教科指導と生徒指導の2つがある。前者の為に、教師は、各教科の知識と指導法を身につけ、児童・生徒が各教科を十分に学べるような実力を身につけなければならない。また後者の為に、教師は、児童・生徒の模範となり、児童・生徒の社会化に寄与するような人格、行動様式、教育技術（コミュニケーション力、集団力学等）を身につけなければならない。
- 7 教師（教職に就く多く人）は、学校という公の組織に属し、その組織の規則に従い行動することが期待される。したがって、教育委員会の仕組みや管理職の権限、校務分掌等の学校組織の特質を理解しておくことが必要である。また、学校組織の中で、組織人として生きる人間関係能力も養う必要がある。後者に関しては、大学での様々な体験（キャンパスライフ）が役立つであろう。

8 学校は地域社会の中にはあって、地域の人や児童・生徒の親との関係も大切である。教師は社会性を身につけ、常識ある行動をとる必要がある。「モンスター・ペアレンツ」の出現に対しては、適切な知識と技術を持って対処する必要がある。

9 教員採用試験に受かり教職に着けば、後は自動的に教師としての仕事が遂行できるわけではない、教師は学び続け、知識や技術の向上をめざさなければならない。教師の研修制度が公に用意されている。自己研修も大事である。

10 教職には、フォーマルな側面だけでなく、インフォーマル側面もある。それは、教育目標があいまいで、具体的な教育現場は、教師の自由裁量に任される部分も多いせいでもある。教師の人柄や思想や力量や考え方によって、実際の教育や指導が違っている。教師の人柄や実力が問われる所以である。

11 教育や教職には長い歴史がある。古今東西の教育思想、教育理論、教育実践、過去の教師像に学び自分の教師としての力量や深さや幅を広げる必要がある。

12 教師を描いた文芸作品やマンガなど、そこから学べることも多くある。教師の隠れた側面やホンネ部分を暴露し、教師とは何かを、根底から考える材料になる。（「二十四の瞳」「GTO」「ハレンチ学園」他）

13 外国の教育や教師のあり方、あるいは教育方法を知り、日本のそれと比較することは、教育や教師に関する知識や知見を深めることになる（比較教育的視点）。また、現代のグローバル化した社会において、教育の国際化、異文化間接触は進んでいる。多文化教育、異文化間教育の視点を学び、海外子女問題、帰国子女問題、ニュカマーの教育などに対処する必要がある。

14 情報化社会の中で、情報機器の適切な取り扱いのできる教師が求められている。デジタル教科書、インターネット、ケータイの取り扱いが問われている。

15 社会規範の揺れ動く時代にあって、教師の道徳意識、マナー意識は大事になっている。児童・生徒の模範となると同時に、その指導が大切になっている。

16 教育は、政治、経済、社会、文化、科学など様々な分野と密接な関係がある。教育とそれらの分野との関係を日頃から学び、視野を広げることは教師として必要である。児童・生徒は、教師の広い視野から学び、社会化される。このように、教職には、幅広い知識と技術と実践力が要求される。

柔軟な思考が大事

武内 清

私は学部・大学院そして大学（武藏大学、上智大学）に就職してからも教育学（正確には教育社会学）を学び且つ教えてきたが、それらは教育研究を目指していて、教育実践とは距離を置いていた。敬愛大学に6年前に奉職するようになり、はじめて教員養成や教育現場といふものを意識するようになった。

敬愛大学こども学科に入学てくる学生は、小学校の教員になることを目指して入学してくるものがほとんどである。大学のカリキュラムも教員採用試験や教育現場向けのものが多く、学生たちは、教育現場や実践に役立つ内容が教えられる。敬愛大学の卒業生は教育現場に出て、即戦力として教える力を備えている。それは敬愛大学のメリットだと思う。ただ、それは『教育工場の子どもたち』（鎌田 慧、岩波書店、1984年）と揶揄されるような狭いものであってはならない。

教育実践に役立つ技術や方法を学び、実質的にそれを身に付けることはとても大事なことである。しかし社会や技術が大きく変化していく現代にあっては、それだけでは足りない。大学で学んだ知識や技術はすぐ古くなり、また現在の教育現場で通用している考え方や方法は将来もそのままとは限らず、その時代にあった新しいものが求められる。それは、各自が自分の力で開発していくものである。

そのような新しいものを作り出す力（汎用的能力や技術）を、大学時代に身に付けたいものである。それは、限定された分野で通用する実践や技術ではなく、広い柔軟な視野で考え、新しい状況に対応できるものである。その際、先輩や同僚との協働も必要であり、その能力（コミュニケーション能力）も養いたい。

大学の教養科目や専門科目、ゼミなど一見教職に役立ちそうもない科目こそ、実はこのような新しい柔軟な思考を養うものであることが少なくない。それが、専門学校と違う大学の特質である。

教育現場や学校の教師の置かれた環境は、狭いということも自覚すべきであろう。子ども相手に、教師は奢ってはならない。「よき教師」がよき市民とは限らない。狭い教師枠組みから脱した柔軟な思考が教師には必要である。

敬愛の学生には「明朗」「子ども好き」「人間好き」「イベント好き」「高いパホーマー」のものが多い。これに、堅実な教育に関する知識や技術、さらに幅広い教養が備われば、次の時代を担う素晴らしい教師が誕生する。皆さんの学びと成長を期待する。

11 学生文化への関心

ハーベスト社

武内清

(本居宣長著、アスカ社、55巻、2007年)

1. 自分の研究を振りかえる

私の専攻は教育社会学で、その中でも、学校や大学の制度や文化の仕組みを、生徒や学生の側から見ていこうとするものである。

教育社会学は、教育の社会的侧面に関心を向けており、あまり個人的なことに言及することは少ない。教育学の研究者の研究テーマや教育内容は、どこかその人の生育歴や教育歴が関連しているように思われる。教育社会学の研究者にもそれが言える。個人の成長過程でのさまざまな経験が知らないうちに研究に反映される。

近頃の大学院生の研究テーマは、自分探しになっている。研究は自分のために行うのではなく、社会のために行うものである。テーマは、社会的なものが選ばれなければならない——これは、年配の教育社会学の研究者が、若い世代の研究テーマに関して共通に持っている感想である。しかし、教育社会学の研究といえども、個人的な経験がどこか研究テーマに結びついているのではないか、自分探しと社会的な問題との結びつきが可能ではないかを感じてきた。

学生運動の世代は、マルクスや吉本隆明などを読み生き方の指針にしていたが、学生運動が挫折した後の世代は、フロイトやユングなど心理学を読んで生きる指針を探し始めた。社会的要因を抜きに心理的に解決しようとする心理学主義が蔓延している——このように感じている社会学者は少なくない。しかし、社会学研究も、心理的な側面を取り込むようになっていて。また逆に心理学も社会的側面を取り込まざるを得なくなっている。社会学と心理学の研究は接近しつつある。

自分自身のことを振り返ると、伝統のある自由な雰囲気の都立高校で過

122

ごした3年間の高校生活は、その後の研究テーマに影響を与えていた。受験競争の真っ只中にいながら、HR、生徒会活動や部活動が重視された当時の都立高校の雰囲気は驚きであり、大変影響を受けた。しかし、東京の中流上層階層の文化を反映した都立高校の学校文化は、中の下の階層出身の私には適応が難しかった。クラスメイトのするスポーツは私には馴染みのない硬式テニスやラグビーであり、話題は私の知らないゴダールの映画であったり、ジャズの音楽であったりした。政治意識も高く、安保反対のデモに参加する学生も少なからずいた。英語の授業では、『動物農場』『ワインズバーグ、オハイオ』『月と六ペンス』といった文学的な作品がサイド・リーダーとして指定され、皆楽々とこなしていた。学校文化と出身階層との関係に関心をもったのは、この高校時代の文化体験（葛藤）にもとづいている。

都立高校の高校の学校文化をやっと少し身につけ、大学に入学したと思ったら、そこは全国津々浦々から学生が集まった「田舎文化」の蔓延した国立大学で、また文化葛藤を味わう羽目になった。このような出身階層、地域と学校（大学）の文化葛藤、個人のハビタス問題は、現在の私の研究関心に底流している。

2. 高校の格差、高校生の生徒文化

団塊の世代の子どもが学校に入学、進学するようになった時、その量の多さからさまざまな教育問題が起こった。特に、団塊ジュニアの高校進学時には、各県で高校増設が相次いだ。

大学院・助手時代、私の参加した共同研究に、「高校の適正規模の総合的研究」（研究代表・清水義弘・東京大学教授）というものがあった。それは、これから各地で新設される高校を、どのくらいの規模のものにするのが適切かというきわめて時宜にかなったテーマの研究であった。

共同研究者で手分けして、調査の依頼の為、各地の高校を訪問した。私は生徒の学校生活の側面から、どの規模の高校が、高校生の学校への適応や進路によい影響を与えるのかを検証した。しかし、データからは学校規

123

模と高校生の学校適応や進路に何ら関連が見出せなかった。困り果て、そこに大学進学率で分類した「高校の格差」という变数を投入してみると、「高校の格差」ごとに生徒の生活や意識の違いがはっきり分化していることを発見した。高校生の生活や意識（生徒文化）の特徴は、進学校では「勉強文化」（Academic Subculture）、準進学校には「遊び文化」（Fun Subculture）、非進学校には「逸脱文化」（Delinquent Subculture）が優位になることが統計的に明らかになつたのである。学校規模より「高校の格差」が、生徒文化を分化させる要因になっていた。また、伝統ある進学校では指導体制が確立しているので、学校規模を大きくしても、教科指導や生徒指導の問題は起こらないが、新設の非進学校で大規模校になると指導が確立していないため、生徒の逸脱行動が発生しやすく指導が難しくなっていることもわかった。この調査研究から、学校格差と生徒文化の関係、さらにはそれらと学校経営の関連に関して、新しい知見を得た。

個人の研究では、出身階層がほぼ同一の私立進学校で、「私にとっての高校生活」というテーマのレポートを書かせたところ、その内容と学業成績（全教科）との間には、はっきりした関連があることがわかった。成績上位者は勉強文化、成績中位者は遊び文化、成績下位者は逸脱ないし無気力な生徒文化が優位となっていたのである。学校間の格差同様、学校内の格差（成績）も、生徒の行動の規定要因になっていたのである。

「生徒文化」の研究は、ベネッセの『モノグラフ・高校生』調査で、その後継続して行った。

3. 大学レジャーランド時代の学生文化

大学生の学生文化への関心は、都内の私立大学に専任講師として勤務し、学生たちと接している中で芽生えた。勤務した中堅私立大学の学生の大学生活は、私の過ごした国立大学のそれとは大きく違つるものであった。

当時「大学のレジャーランド化」が言われた時代もあり、学生たちは過酷な受験勉強から解放され、企業戦士として働くまでのつかの間の4年間の

124

休息（モラトリアム）を楽しんでいた。学生たちは、受験競争で敗れた傷も負っており、その傷を癒すために、レジャー（遊びや交友）に没頭していた。サークル活動、コンパが盛んで、その資金のためのアルバイトもして、授業への出席率は2~3割程度であった。テレビドラマ「不壊のリンゴたち」（山田太一）でも、同様の大学生像が描かれ、学生たちは共感を持ってみていた。

当時、大学生の実態を実証的に明らかにしたいと、ゼミの学生たちと大学生を対象にした調査を、2、3年に1度実施し報告書を刊行してきた。学生と共同作業をする中で、学生の視点を取り入れられると考えたのである。

『現代大学生の意識と行動——武藏大と五大学・一短大の比較』（1982年）では、6大学871名の学生を対象にアンケート調査を実施し、大学ごとに学生の意識と行動の差異をデータで検証した。「大学レジャーランド志向」「アカデミック志向」「サークル志向」「クリスタル志向」「就職志向」という大学生の行動類型も因子分析から抽出した。

『大学生の受講態度とその関連要因の研究』（1985年）では、学生の授業時の座席の位置が、受講態度のみならず、日頃の行動やファッショナブル度にも関連しているという仮説で、33教室で（1教室3人）100名の学生の受講態度を観察した。同時にその学生（およびその周辺の席の学生）に授業後アンケートも実施し仮説を検証した。前の座席の学生は授業態度が熱心で校外でもまじめな行動傾向の持ち主であり、後ろの座席の学生は授業中聴講以外のさまざまなことをし、遊び志向が強いことが明らかになった。座席とファッショナブル度の関係は明確にはみられなかった。ファッショナブルな学生は、後ろの席に座っているのではないかという仮説であったが、それは検証されず、彼（彼女）らは、授業に出ていないと推察された。

『大学におけるゼミナール、演習の内部過程に関する実証的研究』（1986年）では、ゼミごとに教員のパーソナリティや教育観が違い、それに対応して集まつくる学生のタイプも違い、実際のゼミの進め方も違うのではないかという仮説のもとに、武蔵大学の22のゼミ、演習で、「担当教員へのインタビュー」「学生へのアンケート」「実際のゼミの参与觀察」の3つの調査を行つた。「講義型」「一对一型」「討論型」という3タイプのゼミ・演習の型が

125

見出され、ゼミへの満足度は「討論型」で高いなど、ゼミごとの違いを詳細に明らかにした。

『都市における人間の動態の考現学的調査』(1988年3月)、および『現代大学生&若者の生態の社会学——試験、サークル活動、部室、価値観、恋愛感、悩み、話し方、余暇、待ち合わせ行動、ライフスタイルの分析』(1988年5月)では、大学生や若者の行動を考現学調査(観察)やアンケート調査によって明らかにした。大学生の試験前のノートの貸し借りや部室の様子など、大学生のさまざまな行動が実証的に明らかになった。

これらの学生との共同作業を感じたことは、中堅私立大学の学生の仲間志向の強さ、そして共同作業での力を發揮するという点である。ゼミ時間の何倍もの時間を仲間と共に作業し、水準の高い報告書を書き上げた。仲間との共同作業の為には自分の時間を犠牲にする人の良さを備えていた。

「ゼミの友人とお酒を飲んでいても、結局最後は調査のことで終わってしまう日々を過ごしました。こんなに人間と仲良くなれたり、信頼したりしたことはなかったでしょう」「新宿駅でスキーに行くギャル達を横目に見て、『なんで春休みなのに大学へいかなきゃいけないのか』と思いつながら最後まで付き合ってしまいました」「『じゃあ、明日総研(総合研究室)10時半ね』一体幾度この台詞を聞いたんだろう。煮詰まりもうドロドロ。何時しか人間関係は険悪になり、心は古雑巾のようにボロボロになっていた。ああ、ゼミとはこんなに罪作りなものであったのであろうか。春休みは霞のように消え去っていたのであった。青春なんってこんなものさ」——このような感想が、報告書のあとがきに多く書かれている。

このような、共同作業、ゼミ時間を超えた報われない作業は、個人主義的な傾向が強い偏差値の上位の大学ではなかなか成立しない。中堅の大学には、損得を抜きにした仲間志向の強い学生文化が育っていると感じた。

4. バブル期、バブル崩壊後の大学生

『アクロス』1989年5月号の特集「ワガママ Hanako はどこへ行く」には、

126

バブル期の女性の贅沢な生活が描かれている。当時これを参考に、「上智 Hanako」の一日を学生に描いてもらった。次のような当時の典型的な女子学生像が描かれた。

朝は早起きして、授業に真面目に出る。「熱心に聞く講義」「出席して割り当てだけこなせばいい語学の講義」「出席のためだけの講義」を使い分ける。キツイ体育系の部は避け、気が向いた時だけ出ればいいサークル(テニス同好会)に所属。そこで男の子とのつきあいも自然とできる。同性同士で群れることが一番楽しい。教室で、学食で、茶店でと女同士のおしゃべりは続く。8時に帰宅し、母の料理を食べ、家族とくつろぐ。話題のテレビ番組、好きな音楽、好みのシャンプーに囲まれ、平穏な一日が終わる。

これは、豊かな社会の恩恵を十分に受け、自分の義務(授業に出ること)は最低限に果たしながら、自分の好きなことと、自分の好みに合うことをしたたかに遂行する豊かなバブル世代の学生の姿である。就職も売り手市場で、楽々と就職の内定を得ていた。

そしてその後、バブル崩壊の不況期を経て、就職難になり、学生たちも就職のことを気にして「まじめ」になり、遊び志向の学生は少なくなってしまった。これらをさまざまな大学生調査のデータからも明らかにした。

全国大学生協の調査で、大学生活の重点を、1980年と2006年を比べると、「豊かな人間関係」(34.7%→16.9%)が減少し、「勉強第一」(19.5%→28.3%)と「ほどほど」(10.6%→19.6%)が増加している¹⁾。

われわれの研究チームで実施した「12大学・学生調査」のデータでみると、「大学生活の比重」に関して、「部活、サークル」の比重は減少して(1997年60.0%→2003年56.6%)、「学業、勉強」の比重が高まっている(50.7%→55.9%)。勉強重視の傾向は、他の回答でもみられる。大学の授業への出席率が上がっている(「80%以上」62.6%→67.1%)、「先生との関係」への満足度が上昇している(7ポイント増)。「試験やレポートで評価するより出席

127

を厳しく」と希望(9.3ポイント増)、「大学は多様な体験の場というより学問の場」と考える(8.8ポイント増)、「学生の自主性に任せせるより教員の指導」を期待(7ポイント増)など²⁾。

このように学生は、勉強志向やまじめ化傾向を強めていった。その背景には昨今の教育重視の大学改革の影響や就職難に対する学生の対応がある。

大学進学率が上昇するにつれ、大学間の格差も拡大し、大学(類型)ごとに学生の特質や大学生活も大きく違っている。われわれ研究グループでは、「21大学・学生調査」(2003~04年実施)で、調査対象の21大学をさまざまな指標から3つの類型(「新興大学」「中堅大学」「伝統総合大学」)に分け、その学生文化の特質と大学教育との関連を考察した。

「新興大学」の学生は、部、サークル活動参加率は低い。授業には熱心に出席しているが、それは将来の職業に役立つ資格を取るためにある。大学に求めるものは、資格に特化した専門学校的なものであるが、充実した毎日が送られているわけではない。一方、「伝統総合大学」(上智大学はこれに入る)の学生は、部、サークル活動に参加し、大学生活を楽しみ、今の大に満足しているものが多い。自分に対する自信もある。大学に資格より、幅広い教養やさまざまな体験を求めている。中堅大学はその中間である³⁾。

5. 大学生文化の特質と大学教育

大学生の学生文化は、高校生のそれより広範な広がりと深さをもつ。大学生の勉強文化は、大学の学問や授業のあり方とも関連し、また大学外の知識の営みとも連動している。大学生の遊び文化は、時代の最先端を行く青年文化と結びつき、流行や情報やメディアとの結びつきが密でマニアックになる。非行文化は逸脱的というよりは、大人文化への対抗性を強め、対抗文化(カウンター・カルチャー)としての特徴をもつ。現代の学生は、大人や教員に対する表立った対抗や反抗はないものの、権力のある上からの支配の意味を無化する戦略をとっている。私語や代返、ネット情報のコピーなど、いつの時代も教員と学生の攻防は続いている。

128

現代社会の学生の特質に見合った大学や教育のあり方について、私見を述べておこう⁴⁾。

第一に、大学の授業では、情報の収集やその処理能力、集団討議の中でのことを決定していく能力など、社会で必要な一般的能力を培っている。その潜在的能力が社会で生かされる。また学生は、大学における学問(知)を媒介にしたさまざまな活動を通して人間的に成長する。大学教育を充実させること、知識の伝達だけでなくゼミや演習での討論や共同作業を通じて、知の創造に参加する体験をさせることが大切である。

第二に、大学生の期間は、子どもから大人になる過渡期であり、根源的知識の探求と厳しい試練がなされる通過儀礼の期間である。そこでは学生の選択性や主体性が尊重される。授業だけでなく部やサークル活動や友人関係を通しての主体的に切磋琢磨することで学生は成長する。多面的な活動をする学生ほど大学への帰属感は高くなる。これからの中の大学は学生が多面的に活動できるコミュニティとしての特質をもつことが必要であろう。

第三に、一人の学生の成長をトータルに配慮することが今大学に求められている。大学の入学から就職、進学、留学まで、学生の全面的な成長の観点から、きめ細かい学生支援が必要である⁵⁾。

このように、自分の経験や職場が、自分の研究関心に影響を与えている。

注

1) 全国大学生活協同組合連合会「第42回学生の消費生活に関する実態調査報告書」、2006年。

2) 武内清編『12大学・学生調査』、2003年、上智大学学内共同研究報告書。

3) 武内清編『学生のキャンパスライフの実証的研究——21大学・学生調査の分析』、科研報告書、2005年。武内清編『現代学生の生活と文化——学生支援に向けて』、科研報告書、2007年。

4) 武内清編『キャンパスライフの今』、玉川大学出版部、2003年。

5) 武内清編『大学とキャンパスライフ』、上智大学出版、2005年参照。

129